



南の躍動

令和7年度 第3号



奄美のよさを生かした魅力・活力ある教育の推進

大島教育事務所 令和7年11月6日

長距離走行にはドロップハンドル

指導課長 山田 剛

自転車のドロップハンドルを御存知でしょうか。羊の角のようにくると曲がったハンドルのことです。握る位置を変えることで姿勢と重心を調整して体への負担を分散することができるため、長距離走行が可能になります。一方で、いわゆるママチャリと呼ばれる自転車は、重心がほとんど移動しないため、長時間乗っていると腰が痛くなり、長距離の走行には向いていません。



授業においても、1単位時間ではなく単元という長距離を走り抜くためには、様々なスタイル（重心移動）を組み合わせしていく方法が有効だと考えます。例えば、単元を通して教師が一方的に話し続けたり、児童生徒に任せきりになったりしたことで深まりのない授業になってしまった経験はありませんか。これを避けるためには単元を見通し、教師がしっかり教える場面、児童生徒が主体的に学ぶ場面を織り交ぜながら計画を練ることが大切です。

また、振り返りがワークシートに○を付ける方法ばかりで形骸化していると思われる実践が散見されます。単元を通した学習の中の必要なタイミングで児童生徒が自分の言葉で、「何が分かるようになったか（分からなかったか）」「調べ学習で選択した方法は適切だったか（次はどのような方法で調べてみたいか）」「自分の考えが広がり深まったことは何か」等を記述することは、児童生徒自身が自らの学びについて確認、調整するために大切なことです。そして、こうした振り返りを通して得た気づきや新たに立てた目標は、マイゴールチャレンジや次の学習につながっていくはずです。

ドロップハンドルのように様々なスタイルの授業をバランスよく取り入れていくことで、児童生徒が「楽しい・分かった・できた」と思える授業を目指していきましょう。

教室を全ての児童生徒にとって過ごしやすい居場所に

教室を全ての児童生徒にとって過ごしやすい環境にするための「環境づくり」について、「刺激の調整」「構造化・視覚化」「自己有用感の育成」の三つの視点で紹介します。

刺激の調整	構造化・視覚化	自己有用感の育成
- 教室前面の情報量を減らす。 - カーテンやホワイトボードを使って視界から不要物を隠す。 - 不要な音を出さない。出す場合は、表現や音量を調節する。	- 共有物の置き場所を明確にする。 - 整理整頓について、一目見て分かるカード（手本カード）を提示する。 - 提出用ケースなどを使用し、分類、整理する。	- 分からないことを遠慮せずに伝える援助要請に対する適切な援助を行う。 - 掲示された作品へのコメントや相互評価を行うなど称え合う場を設定する。 - 努力する過程を認め、積極的に称賛する。

「刺激の調整」は、教室に落ち着きをもたらし、「構造化・視覚化」は、児童生徒の適切な行動を促し、「自己有用感の育成」は、学習や活動への意欲を高めたり、粘り強く取り組んだりすることにつながります。

上記3点は、特別支援教育において大切にされている視点です。全ての教職員が、これらに留意した実践に努め、今後も特別支援教育に対する理解を深めていきましょう。



「体力アップ！チャレンジかごしま」前期の取組状況

「体力アップ！チャレンジかごしま」は、児童生徒の運動習慣の育成や体力の向上、自己の健康や体力の課題に応じた実践力の育成を目的として、各学校で取り組まれています。

令和7年度前期の大島地区の取組状況は小学校93.8%（前年差+2.4）、中学校95.6%（前年差+22.3）で、下記の小学校34校、中学校13校が県内トップ10入りを達成しました。

今後も引き続き、多くの学校が取り組むことを期待しています。

【県内トップ10にランキング入りした大島地区の学校（前期）】

※ ○は、ランキング入りした種目数

小学校	朝日小①、東城小①、赤木名小③、節田小②、緑が丘小①、手花部小①、大棚小④、名音小⑥、今里小①、名柄小⑤、阿室小①、西阿室小①、諸鈍小①、伊子茂小①、嘉鉄小③、秋名小①、花徳小①、母間小①、山小②、手々小⑤、天城小②、岡前小⑩、岡前小与名間分校④、西阿木名小②、西阿木名小三京分校①、犬田布小①、馬根小⑤、糸名小②、大城小①、国頭小①、知名小①、上城小①、下平川小②、茶花小①
中学校	朝日中②、芦花部中②、住用中①、赤木名中⑥、田検中⑤、名柄中④、伊子茂中①、赤徳中⑥、井之川中①、東天城中③、手々中①、天城中④、与論中②

大和村 大和の名を誇りに思う教育～郷土を知り、絆を深める～

大和村では、「大和村スタイル」と題した郷土教育カリキュラムを作成し、村内4小学校が各学期に1回のペースで集合学習を行っています。活動テーマは、低学年は「海」と「山」、中学年は「すもも」と「さとうきび」、高学年は「棒踊り」と「地域振興券のデザイン」としており、二つのテーマを隔年で実施して体験的な学びを推進しています。また、体験と関連した郷土教材を用いた道徳科の授業を行うことで、郷土のよさや課題を実感する学びを深めています。

これらの集合学習の機会は、小規模校の児童にとって協働的に学ぶ貴重な機会であり、こうした活動を通して、郷土を愛し誇りに思う子供の育成を目指しています。



龍郷町 IR研修を通して築く“学び合う教員集団”

龍郷町では、中学校区ごとにブロックを設け、小・中学校の教員が合同でI R (Instructional Rounds) 研修を行っています。各ブロックで育みたい児童生徒の姿を共有し、授業研究を通して小・中学校の連携を深めています。また、「子供の学びの姿（事実）」に焦点を当てて授業を観察・分析することで、互いの授業力の向上も図っています。

令和3年度から始まったこの取組は、今年度で5年目を迎えました。現在も、鹿児島大学の廣瀬真琴准教授の御指導のもと、改善を重ねています。校種や教科の枠を越えて語り合うこの研修は、教員同士の学び合いを促し、学び続ける教員集団づくりにつながっています。



和泊町 郷土で育てる「肝心の教育」～和泊の心を未来につなぐ～

和泊町では、「礼儀正しく自立心に富む子どもを育てる」ことを目指し、小学校1～3年生を対象に「肝心の教育」に取り組んでいます。生活科や総合的な学習の時間を通して、「お茶」による礼儀作法やあいさつ、西郷南洲翁などの先人、方言、特産のエラブユリなど、郷土への理解を深めています。

令和8年度からは、対象を中学3年生まで広げ、「郷土を、郷土で学ぶこと」を通して、夢や希望を実現し、ともに未来を創る和泊の人づくりを新たな目的に掲げます。郷土の産業（サトウキビ、黒糖）や歴史、文化（三味線、踊り、塩づくり）、自然に学ぶ体験的な活動を教育課程全体に位置付け、地域とともに歩む学びをさらに広げていきます。



【タイトル横の写真】喜界島の空から鳴き声で秋の訪れを知らせる「サシバ」（喜界町教育委員会提供）

各市町村の特色ある教育活動